

第 21 回 ユニット同士の接続

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て 2008 年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011 年 4 月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

職員の離職の原因の一つに夜勤の負担がある。特別養護老人ホームの夜勤体制は、従来型であれば入居者 25 人以下は 1 人、ユニット型であれば入居者 20 人に対して 1 人となる。数の上では従来型よりもユニット型の方が楽であるが、介護現場ではユニット型の方が負担感が強い。というのも、例えば 50 人の従来型施設の場合、夜間は 50 人を 2 人の職員で見ることになるため常に頼れる誰かがそばにいてくれる（26 人以上 60 人以下は 2 人以上）。2 人介助の時には助け合い、少し時間が空いたときにはおしゃべりをすることもできる。緊急時にも誰かがいてくれると思うと心強く感じる。その一方で、ユニット型では 1 人で 2 ユニット（20 名）を担当するため、常に独りで働くことになる。他のユニットに夜勤の職員がいるものの、担当ユニットを離れることはほとんどなく、相互に関わり合うことは少ない。

夜勤時の負担感を詳しく見ていくと肉体的な負担よりも心理的な部分が強い。多くの施設で取り入れられている 1 夜勤 1 労働体制（22 時に入り 7 時に帰宅）の場合、業務に入る 22 時の時点で大半の入居者は就寝しており、夜間は定時の排泄交換が中心となる。朝方の起床介助はかなりの負担であるが、7 時まで完全に完了させようとするのではなく、起床時間に幅を持たせ 7 時以降でも良いと切り替えれば対応することもできる。サーカディアンリズム（睡眠リズム）が狂うなどの体調面への負担はあるが、動き回るといった肉体的負担感は少ない。一方、心理的な負担感としては、第一に夜という時間がもたらす不安がある。限られた部分しか照明がついておらず薄暗い環境にいること自体が不安感をおおる。さらに 20 人の入居者が全て自分に委ねられていると考えるとプレッシャーが大きくなる。転倒してないか、問題は起きていないか等、常に気を配ることになる。加えて担当する 2 つのユニットの距離が離れていると、一方のユニ

ツトの様子が分からないために余計に不安感が増していく。

1. 担当する2ユニットの連携

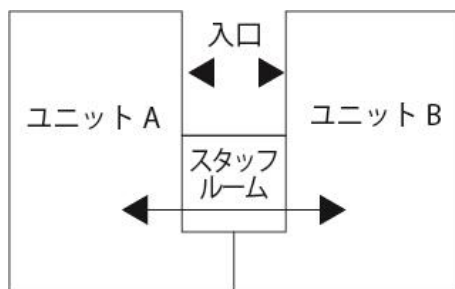
夜間の負担感を軽減するためには、まずは担当するユニット間の連携を高め、それぞれのユニットの様子を把握できるようにする必要がある。ユニット空間には「大きなイエ」というイメージがあり、各ユニットに玄関が設けられている場合が多い。玄関を介して2ユニットがつながる場合、ユニットの独立性が高まるものの相互の情報がつかみにくくなる。入居者同士のなじみの関係を築くためには、ある程度の独立性が必要であるが完全に出入り口を一つに絞ってしまう必要はない。

夜間の介護負担を考慮し玄関とは別にユニット間をつなぐ動線を設けるとよい。スタッフ動線としては、廊下でつなぐ方法が一般的であるが、より有効なのがスタッフルームでつなぐ方法である。2つのユニットの間にスタッフルームを設け相互から出入りできるようにする。相互のユニットにアクセスしやすいのに加えて、ユニット内の音情報が伝わりやすい。夜間は視覚的な情報が取得しにくくなる反面、音による情報は伝わりやすくなる。物音や足音で利用者の動きを察知でき、対応しやすくなる。

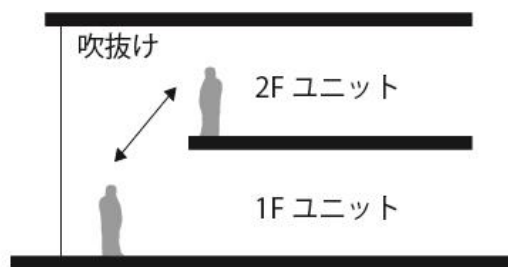
2. 担当外のユニットとの連携

次に担当外のユニットとの接続を考えてみたい。担当ユニットが機能的に構成されていても「一人に対応する」という状況には変わりがない。平面的にユニットをつなぐことも可能であるが、より存在を身近に感じることができるのは上下階の接続である。ユニットのリビングの天井（または床）の一部を取り除き抜け空間を設けると上下階がつながる。音や互いの雰囲気伝わり、互いの存在を身近に感じることができる。誰かがいてくれる。いざという時には声をあげれば助けに来てくれる。そういった安心感が心理的な不安を軽減する。

近年、先駆的な取り組みの良さを取り除いた画一的、定型的なユニット空間が多くなっている。平面的、立体的なユニットの接続は、職員の働きやすさを高めるだけでなく、ユニット空間に変化を与えるきっかけになるのではないだろうか。



スタッフルームを介してのユニットのつながり



吹抜けを介してのユニットのつながり